

平成18年度 寒河江市教育研究所全体講演会

# 人間力を育てるカリキュラムづくりに向けて ～カリキュラム・マネジメントの視点から～

講師 筑波大学大学院教授  
筑波大学附属小学校校長

た なか と う じ  
田 中 統 治 先生



平成18年7月31日

寒河江市教育研究所

## カリキュラム・マネジメントの戦略 ―授業・単元改善から学校改善へ―

田中 統治 (筑波大学)

### 1.はじめに―学習指導要領の改訂動向―

- ・新しい時代はカリキュラムに何を求めているだろうか?  
経済の世界化と学力競争、自由化・市場化の趨勢、学校教育への期待の変化と課題、勉強しない子どもの増加、データをもとにしたカリキュラム改善の必要性
- ・なぜ今 self-managing school なのか? 競争的環境のなかで結果に報いる政策動向
- ・学校成員の自己実現のために、今、何をなすべきか?  
創意工夫による学校改善、足場固めと目利きによってカリキュラム改善の専門家に

### 2.教育課程経営からカリキュラム・マネジメント(C.M.)へ

- ・カリキュラムをどの水準で押えるか (制度・計画・実践・経験の4水準)  
‘紙’キュラムからその実質に眼を向けよう、子どもの学習経験としてのカリキュラム
- ・学習経験の実態まで見通すために必要なカリキュラムの視点  
授業や学習環境もカリキュラムに含める、関係性からみるカリキュラム
- ・教育意図と学習内容とのズレを見極める(隠れたカリキュラム)  
実践者の思惑とは違うことを学んでいる側面(知恵・要領)がある
- ・PDS から SPD への転換:「学校に基礎をおく C 開発」(SBCD)から学ぶ  
現行カリキュラムの抱える課題を明確にし、それを日々の授業改善によって、  
また、教師の参加と現職教育によって、着実に積み上げながら克服する。
- ・組織戦略として C.M.を打ち出そう、意思決定の過程がもっとも肝心。  
到達目標に沿って“教育的に意味ある”経験をどう構成するか

### 3.カリキュラム改善への挑戦: 授業・単元改善から学校改善への道筋

- ・全校のカリキュラムに責任をもつ経営組織が必要  
教務主任をヘッドに、学年・領域の教育活動を評価する部署をつくろう  
全校の教育活動を単元表にまとめ点検する、優れた指導案を保管公開する  
授業と単元の改善作業を常態化し、教師への支援とデータ収集を一体化する
- ・カリキュラム・マネジャの専門的技能  
促進者(facilitator)としての管理職、データをもとに議論する雰囲気づくり、  
学校経営の中心は CM、児童/保護者/地域のニーズ(教育要求)に応える C 改善
- ・小中のカリキュラムを見通す力  
4-3-2 制か 5-4 制かを議論する前に、小中のカリキュラムに精通する。  
小中カリキュラムの接続(アーティキュレーション)は単元開発から

### 4.カリキュラム・マネジメントにおける評価の考え方

- ・改善には評価が必要、評価はデータをもとに行う、小中学生の教育的ニーズの把握  
統計的な資料と、事例的な資料の相互補完性、特に後者の重要性、授業評価もデータ
- ・目標基準型(goal-based)と目標自由(goal-free)型の評価  
第三者による評価の目、評価は多面的な視点から行う方が客観的になる
- ・評価対象となるカリキュラムの多層性  
年間指導計画を単元の視点から点検する必要性、卒業生調査からの示唆
- ・調査としてカリキュラム評価(授業の巧拙を論ずる前に必要な資料)  
評価(≠評定)は実践をふり返る材料の一つ、学校内外の資料収集と分析
- ・カリキュラム・アセスメント(調査)とそのデータ活用  
テストと観察の両面から、複数の眼で多面的に点検しよう、プロセスの評価

#### 5. カリキュラム評価から始めるマネジメントの進め方

- ・評価を前提として目標を記述する  
数値目標化できる側面と、質的にみとる側面を予め決めておく
- ・何のために、誰が、いつ、どのように評価を行うのか  
評価スケジュールの作成と、記録資料の蓄積、経年比較
- ・良いところで悪い箇所を補う「リハビリ」の思想  
問題点や課題を指摘するのみでは改善が進まない、うまくいっている箇所を大事に  
外部評価への対応：学校改善への経営努力を示す、自己評価能力を高める

#### 6. カリキュラム・マネジメントの事例：NHK ETV2001 日本の宿題・学校(9)

「校長の挑戦 教師の意識を変えろ」(2001年4月16日放送より)

- ・小学校での公開授業研究会－静岡県富士市広見小学校佐藤雅彰校長の3年間の試み
- ・中学生による授業評価の試み－福岡県宇美町宇美中学校坂田正雄校長の挑戦

#### 7. まとめ：カリキュラムの改善に必要な会議力と機動力

- ・ひとつにつくカリキュラムから、学校につくカリキュラムへ
- ・「授業評価→単元評価→年間指導計画の評価→教育課程評価→学校評価」の循環
- ・話し合いを効率よく、全員が発言し、決める根拠と評価計画を明確にしよう
- ・消極的な教師文化を克服し、とにかくやってみる勇氣、やりながら考える知恵を
- ・子どもと教師の幸せを追求する営みへ

参考書：

田中統治(編)『確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント』、

田中統治(編)『カリキュラム評価の考え方・進め方』(教育開発研究所、2005年)

「人間力」を育てるカリキュラムづくりに向けて  
ーカリキュラム・マネジメントの視点からー

田中 統治 (筑波大学大学院教授)

1.カリキュラムの目標として「人間力」をどう捉えるか

(1)「人間力」とは何を目指すのか

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の『審議経過報告』(平成 18 年 2 月 13 日)によれば、「人間力」の考え方は、内閣府人間力戦略研究会の報告書(平成十五年四月)をもとにしており、それは知的能力的要素、社会・対人関係力的要素、自己制御的要素などで構成されているが、自立した一人の人間として生きていくための総合的な力を育成することを目指すという意味において、「生きる力」と同じ趣旨のものであるという。

そのねらいは、現実の社会で大人がどのように生き、そこでは何が必要とされるのかを見せることによって、学ぶことの意義を子どもたちに伝え、何のために学ぶのかという目的意識を明確にすることであり、こうした視点から学校教育を見直してみることによってその足らざるところを補い、より充実したものに改善していこうとするものである。具体的には、次の三つの構成要素に整理されている。

- ・ 主体性・自律性 (例)自己理解(自尊)、自己責任(自律)、健康増進、意思決定、将来設計
- ・ 自己と他者との関係 (例)協調性・責任感、感性・表現、人間関係形成
- ・ 個人と社会との関係 (例)責任・権利・勤労、社会・文化・自然理解、言語・情報活用、知識・技術活用、課題発見・解決

これらは、社会の側から視点と、国際的な通用性の視点から、「生きる力」を実社会とのかかわりの中で具体化し発展させることを強調している。

(2)「人間力」と PISA の枠組みとの関係

「人間力」は子どもの社会的自立、職業的自立を重視しているが、国際的な通用性という視点では、「OECD 生徒の学習到達度調査」(PISA 調査)の概念的な枠組みである「主要能力」(キー・コンピテンシー)を参考にしている。PISA は十五歳(高校一年生)を対象に、知識や技能等を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価する調査であり、参加国は 41 カ国に達している。その調査項目は、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、および問題解

決能力の四領域にわたっており、未来志向型の学力として「リテラシー」(情報を入力し、管理し、統合し、創造し、判断する能力)を掲げ、その到達度を五つの水準に分けている。これは学力モデルの世界標準(グローバル・スタンダード)として注目される。

ただし、PISA は特定のカリキュラムを提案にしているわけではなく、自立した市民となるために十五歳まで到達すべき水準を示しているにすぎない。したがって、この世界標準に合わせて、国際的に通用する視点からカリキュラムを編成する方法は明らかになっていない。今後、成績最上位国となったフィンランドのカリキュラムなどがモデルに選ばれるのかもしれない。こうした「模倣」はグローバル化が経済のみならず教育にまで及んでいることを意味しており、このため各国のカリキュラムを「同型化」させる傾向が生じている。

その際に考えるべき課題は、日本の学校教育がこれまで築き上げてきた実績をどう評価し、その成果を継承しつつ、世界標準の学力モデルをどう採り込むかということである。筆者は日本の教育遺産を「J(Japanese)モデル」として再評価し、これを国外に発信する必要性を感じている。「人間力」と「リテラシー」の両者に共通する点は、ひとが生涯にわたって学び続けるために必要とされる基礎的な資質や能力を育成する観点である。これを「生涯学習力」と名付ければ、この種の学力育成こそ各国が二十一世紀を展望して構想したカリキュラムの目標である。つまり、各国は変動の激しい社会を展望して、これに柔軟に対応できるだけの「学習能力」を子どもたちに獲得させたいと願ったわけである。このカリキュラム政策は経済発展を遂げた国の教育改革に共通してみられる特徴であるが、日本の場合、「生きる力」を「人間力」として再定義し、これを目標に独自の J モデルによるカリキュラム開発を進める段階に入ったと言ってよい。

## 2.カリキュラム評価による改善の方法と課題

### (1)カリキュラム評価の困難性とその打開策

そこで子どもたちがカリキュラムによって「人間力」を身に付けていくその仕組みが問題となるが、この仕組みを明らかにする上で、カリキュラム評価が注目される。教育課程の評価については学習指導要領解説の総則編で解説されており、その中で「教育課程の評価が積極的に行われてはじめて、望ましい教育課程の編成、実施が期待できる」と強調されている。

しかし、カリキュラム評価を平素から心掛けて行っている学校は少ない。学校評価が盛んに行われている割には、カリキュラム評価は十分には行われていない。その原因は、評価と評定が混同されてきたために、カリキュラムを評価するためのデータが不足していることにある。カリキュラムを点検する上で必要な基礎資

料が蓄積されていないと、経年比較ができない。根拠が不足している評価は、客観性を疑われるだけでなく、次の改善策も打ち出せない。

学習指導要領解説の総則編によれば、教育課程の評価は、教育課程の編成、実施及び成果についての観点をあらかじめ定めて、組織的・計画的に行われなければならないが、評価の観点としては、学習指導要領第一章総則に示した事項が大切であるが、そのほかに次の観点が重要であるという。

- ア 学習指導要領をはじめとする国及び教育委員会の示す指針の趣旨が十分に生かされ、そこに示された基準が満たされているか。
- イ 学校の教育目標が、学校の教育活動全体を通じて十分に追及され、成果を上げているか。
- ウ 児童生徒の実態と適合するよう教育課程が編成、実施されているか。
- エ 教職員や施設・設備等の諸条件と適合するよう教育課程が編成実施されているか。
- オ 保護者や地域社会の期待に応える教育課程となっているか。

これらの観点は教育課程の評価事項ではあるが、評価項目にまで具体化されていない。子どもたちが「人間力」を育てているどうかその成果を評価するには、これに特化した評価の観点と項目が必要である。とくに、「人間力」を知の側面からとらえた「確かな学力」の習得状況を把握する方法の開発が求められる。その手始めは、「確かな学力」を育むために教育目標の記述を見直し、さらにこれにかかわる児童生徒のニーズ(教育要求)とその充足度を継続的に調査することである。

## (2)「評価に耐える」目標の記述とは

カリキュラムは教育目標を達成するための計画である。したがって、達成可能な教育目標を掲げないと、カリキュラムの目標になりにくい。従来、教育目標とカリキュラムの関係が曖昧になりがちであった。外部評価が採り入れられた現在、説明義務を果すため目標と結果の対応関係が問われる。曖昧な教育目標ではカリキュラム評価が困難である。たとえば、「わかる授業の実現」を目標に掲げるならば、児童生徒の授業の理解度を調べないと、教育要求に応えることにつながらない。目標が教育要求に即して設定されると、それはニーズの充足度を評価することを前提とする。このため、事後の評価に耐えられるように教育目標を記述する必要がある。

ここでいう目標は単年度で評価すべき時限目標であり、その意味で重点目標である。学校の教育目標は究極的な目標や方向目標でもよい面もある。だが、PDSによるカリキュラム・マネジメントにおいては、事後評価を年度末に行い、その結果をもとに次年度の目標を設定するから、曖昧な目標は意味をなさない。教育

要求の内容も達成可能な目標として書き替え、それを評価可能な指標に変換しなければならない。そうすれば、カリキュラムのどの活動によって教育要求を充足させるか、また、その成果をどのような資料によって検証するかという課題が明確になる。

カリキュラム評価は児童生徒の学業成績をみとることではなく、カリキュラムの改善効果を振り返る活動である。これまで評価と評定が混同されてきたために、カリキュラム評価が十分に行われなかった。また、カリキュラム評価は教育実践の良し悪しを判断することだけでもない。価値判断による評価が先行すれば、実践者を「守り」の状態に追い込んでしまう。この問題点を克服するには、カリキュラムを評価する以前に、調査するという発想が求められる。カリキュラム・アセスメントの考えは調査による資料の収集を重視し、実践者の力量や学力テストの結果も資料の一つとみなす。つまり、カリキュラム評価をカリキュラム調査と考えるわけである。今後、「人間力」の向上を目指すのであれば、教師がカリキュラム・アセスメントという調査法を習得することが不可欠である。

### 3. 「人間力」を育てるカリキュラムづくりのために

従来の学力モデルはカリキュラム開発に利用するというよりも、学力のあり方を一般向けに分りやすく図示したものが多く、この点で不十分なところがあった。その原因は、カリキュラム評価を前提としていないために、カリキュラムの目標として自覚されなかったことがあげられる。これまでの教育課程改革に関する議論もカリキュラム評価の資料を欠いたままになされるきらいがあり、このデータの欠落が 90 年代後半から起こった学力低下論によって厳しく問われてきたところである。これからの学力モデルには、分りやすさよりも、各学校でのカリキュラム開発に活用できるような緻密さが求められる。

学力モデルがカリキュラム開発に役立つために必要な条件とは何だろうか。それは、第 1 に「～力」といった学力要素の羅列的な表現を改め、科学的な根拠を示しながら、目標とされる学力の内容を整理することである。「人間力」の場合も、その根拠とされる心理学の知見(コンピタンスの概念)をもとに、学ぶ意欲とキャリア教育、社会性と体験活動、学ぶ技能と学習指導、さらに教科知識と生活への活用などの関係を明確にする必要がある。質の高い学力は、質の低い学力と対比させる形で、また、それを克服するための手立てと対応させる形で、根拠を示しながら厳密に定義しなければならない。

第 2 に、学力の内容をカリキュラムと客観的に対応させるため、学習者の発達と学習の準備性に即して段階的に計画化することである。「人間力」は幼・小・中・高校のカリキュラムによってどのように段階的に育成すべきものなのか。子ども

が高校三年生に達したときに、どのような課題をこなせるようにすればよいのか。そこまで届かせるために、下級学校のカリキュラムをどう構成すればよいのか。これらの問いに答える形で、カリキュラムを構想する必要があるが、その手がかりとすべきは各学校での子どもの発達状況に関する資料であり、これをもとに教育要求の内容を具体的に把握しなければならない。

第3に、この計画を新しい単元開発によって試行するうえでは、実践者が「人間力」の達成状況を観察できるようなキイ・ワードへの変換が必要である。たとえば、何らかのテストでこれを確認するのであれば、どのような課題を何割の子どもがクリアできるようになるまで指導すればよいのかなどの具体的な目安を設定する必要がある。とくに、実生活との関係で活用される力は、ペーパーテストではなく、パフォーマンスやポートフォリオなどによって質的に評価されるから、このような場面でここまでできる実践力として分りやすく記述すべきである。

第4に、複数の単元案のうちどれが有効であるかを確認し選択するため、「教育目標に準拠した」(goal-based)評価と、「目標にとらわれない」(goal-free)評価の双方を活用することである。このうち、前者が一般には用いられ、いわゆる絶対評価として普及している。後者は「第三者による評価」とも呼ばれ、必ずしも教育目標に拘泥せず、学習者のニーズ充足などの側面に注目する。カリキュラム評価は両者を併用して達成される。したがって、「人間力」の場合も、この二つの方法を活用する方が望ましい。

そして第5に、カリキュラム評価の結果を教育目標の設定と教育計画の立案に恒常的に反映させるシステムを構築することである。実際に行われたカリキュラムの効果を多様な観点から評価して、その結果をフィードバックする。このサイクルはP(plan)・D(do)・C(check)・A(action)、すなわち、計画－実施－評価－改善と一見似ている。しかし、違いはカリキュラム・マネジメントが子どもの学習経験の現状を観察するところから開始されることである。つまり、それはC(check)・A(action)・P(plan)・D(do)のステップを踏む。PDCAからCAPDへの転換がカリキュラム・マネジメントにおいて重要である。その理由は、カリキュラムの考えが学習者の経験内容に注目するからである。PDCAからCAPDへの転換が必要な理由も、カリキュラムの実質に目を向けるためである。

これらの条件を満たす学力モデルがカリキュラム開発によって達成可能であり、その修正によって妥当性を高めることができる。近年、注目されている脳科学の成果をもとにしたカリキュラム開発は上記の条件を満たす可能性を秘めている。

「人間力」も脳科学の知見を応用しながら整理してみることができるだろう。



## 参考資料

田中統治（たなかとうじ）先生のプロフィールです。

筑波大学 大学院 人間総合科学研究科 教授



### <略歴>

昭和26年 鹿児島県生まれ  
昭和54年 九州大学大学院博士課程  
教育学研究科 単位取得退学  
九州大学教育学部助手  
昭和58年 愛知教育大学教育学部助教授  
平成5年 筑波大学助教授 教育学系  
平成9年 筑波大学教授 教育学系

### <主な著書>

「カリキュラムの社会学的研究」東洋館出版（1996）

### <主な共著書>

- ・「新版カリキュラム研究入門」勁草書房（1999）
- ・「21世紀の学校改善」教育開発研究所（2003）
- ・「現代カリキュラム事典」ぎょうせい（2001）
- ・「確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント」  
教育開発研究所（2005）

### <主な活動>

- ・日本カリキュラム学会代表理事、日本教育社会学会、日本子ども社会学会、  
日本教育学会、関東教育学会他
- ・研究開発学校企画評価協力者、スーパーサイエンス・ハイスクール企画評価  
協力者、中央教育審議会・初等中等教育分科会・教育課程部会・教育課程企  
画部会 専門委員他